多　様　の　統　一

大阪国際大学　学長　　金　子　敦　郎

アメリカという国のモットーは「多様の統一」（ジョン・スタインベック）である。その「多様」と「統一」の荒々しい営みが、この国のほどばしるようなエネルギーとダイナミズムを生み出してきた。大阪国際大学の統合・改革を、そんなアメリカの「多様と統一」に重ねてみることがある。

大阪国際大学は2002年４月、同女子大との統合によって、経営情報、法政経、人間科学の３学部に短期大学部を加えた実質４学部体制の、大きくはないが文系総合大学の形を整えた。だが、別々のキャンパスで、異なった歴史を歩んできた２つの大学を、取りあえずくっつけたのだから、いまはまだ「多様」のままである。それをいかに「統一」し、そこから新しいエネルギーを造り出すかが、本学の統合・改革である。

その統合・改革のプロセスにおいて、「知の府」の中枢に位置する紀要が果たすべき役割は大きい。統合後の新しい大阪国際大学の紀要のタイトルは、議論のすえ「国際論叢」を引き継ぐことになった。その第１号が発刊される。

大学のグローバル化の急進行、そして「全入時代」を迎えつつある中で、大学の「高校化」は避けられない現実であり、直視しなければならない。大学教員に求められるのは「研究より教育」だとされる。だからといって「研究」が軽視されるとすれば、それは誤りだと思う。「教育か研究か」といった二者択一でもないし、どちらに重心を乗せるかのバランス論でもない。大学において研究という知的挑戦がおろそかにされれば、大学そのものの活力の喪失、知的退廃につながる。近年、日本学者のノーベル賞受賞が続いているが、彼らは良き教育者であることを誇らしげに語っている。教育への確信は研究の確信から生まれる、のではないかと思う。

アメリカは「人種のるつぼ」と言われてきた。これは「多様」な移民の「WASP」（白人・アングロサクソン・プロテスタント）への「統一＝同化」を意味した。しかし「るつぼ」はいま、「サラダ・ボウル」にとって代わられつつある。中南米やアジアからの移民の大波でアメリカの「多様」はますます多様化し、「WASP」支配を終わらせた。「多様の統一」は「多様性（ダイバーシティ）の尊重、そして統一」に変わった。それでも「アメリカ」はやはり「アメリカ」なのである。

「国際論叢」は守口と枚方の「２つの文化」をつなぎ、混ぜ合わせる「サラダ・ボウル」である。「異文化」のぶつかり合いのなかから、新しいエネルギーが生まれ、これまでどちらのキャンパスにもなかった「味」の新たな文化が生まれてくるに違いない。